

問題一 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「蓼食う虫も好き好き」という言い方がある。There is no accounting for taste.——大学受験で必ず覚えさせられる言い回しの一つだ。直訳すれば「味(好み・趣味)については説明が出来ない」という意味になる。まことにその通りではある。ある音楽を聴いて何かいい気分になったとする。それがホテルのラウンジで流れていたムードミュージックであれ、ラジオでふと耳にした名前も知らないシンガーソングライターの歌であれ、テレビのコマーシャルで(A)使われていたクラシック音楽のひと節であれ、自分にとってどうしてその音楽が気になるのか(どうしてそれが好きなのか)、その根拠を説明したりする必要は別にない。「その聴き方は間違っている」などとケチをつける。資格は誰にもない。他人がどう言おうと、どんな人にも自由に音楽を聴き、それについて自由に感じる神聖な権利がある。

しかしながら件の表現が「好みは感性だ」、「感性について語ることは無意味だ」、「どう感じようが人の勝手だ」といった方向で理解されるとすれば、つまり、好みの合う人だけで集団を作り、好みが合わない人との対話を、遮断するための方便として用いられるとすれば、それは少し寂しい。コンサートには行かず、ほとんど専らCDやパソコンからのダウンロードなどで音楽を聴くことを慣わしとしている人々の場合は違うのかもしれないが、(B)大多数の人にとって音楽を聴く最大の喜びは、他の人々と体験を共有し、心を通わせ合うことにあるはずである。例えば素晴らしいコンサートを聴き終わった後、それについて誰かと語り合いたくてもうずうずしているところに、ぱったり知人と出会って、どちらからともなく「よかったよね!」の一言が口について出てきたときのこと。互いの気持ちがびったりと合ったと確信させてくれる、コンサートの後のあの「一言」がもたらす喜びは、音楽を聴いている最中のそれに勝るとも劣らない感興を与えてくれると、私は信じている。素敵なコンサート後の帰路、せつかく知人と一緒なのに、互いに押し黙ったままではいるくらいつまらないことはないだろう。自由闊達に語り合えれば合えるほど、やはり音楽は楽しい。聴く喜びはかなりの程度で、語り合える喜びに比例する。音楽の楽しみは聴くことだけではない。「聴くこと」と「語り合うこと」とが一体になってこそ音楽の喜びは生まれるのだ。

とはいえ、「よかったあ……!」と感嘆の声をあげるだけで満足するのではなく、もつと彫り込まれた表現で自らの音楽体験についての言葉を紡ぐのは、もとよりそう容易なことではない。ヘーゲルはかつて音楽の出発点が「心情の「ああ」と「おお」であるといくぶん。侮蔑的に述べ、それが分節的な把握の対象とはならないと考えた(『美学講義下巻』、作品社、一一八ページ)。音楽を語る言葉がややもすると間投詞のようなものに接近する理由は、このあたりにあるのかもしれない。思えば私自身もかつては、「うまかった／へただった」、「よかった／よくなかった」、「感激した／退屈だった」といった大雑把な印象以上のことを、ほとんど口に出れなかつた記憶がある。そして何か気の利いたことを言おうと、通ぶって「あそのファゴットはあんな風に吹いていいものかねえ」などと口にしてはみても、どうにも周囲と言葉が噛み合わず、後味の悪い思いをしたことも、少なからずあった。音楽の余韻を(C)楽しもうとして、いろいろ話をしていたはずなのに、「そんな細かいことがどうかしたの?」と気色ばまれたりして、せつかくのコンサートに余韻が冷めてしまうのだから、本() 転()ではある。確かにこんなときには、「余計な議論などするんじゃないやなかった」という後悔を込めて、思わず「蓼食う虫も好き好きなのさ……!」とうそぶきたくもなる。だが今にして思えばああした行き違いは、(D)趣味についての意思疎通の原理的な不可能性に起因するものなどではなく、単に当時の私の言葉のレベルが余りにもちせつただただのことなのだろう。「音楽を語る言葉を磨く」ことは、十分努力によって可能になる類の事柄であり、つまり音楽の「語り方」聴き方には確かに方法論が存在するのだ。

美術史家のゴンブリッチは名著『美術の歩み』の中で、興味深いことを書いている(上巻、美術出版社、三八ページ)。例えば人がある絵画をなぜ傑作だと感じたのかは、「普通、言葉では正確に説明することはできない。しかし、このことは、この作品もあの作品も、同じようによいものだから、好き嫌いの問題は議論することができないとかいう意味ではない」。こうした問題について議論をすることを通して、「以前には見逃していた点に私たちは気付くようになる。私たちは、各時代の芸術家たちがなし遂げようと努力した調和ということに関して、感覚を高めるようになる。これらの調和に対する私たちの感覚が豊かになればなるほど、私たちは、それら作品をもっと楽しむようになる」。ゴンブリッチいわく、「紅茶を楽しむ習慣をもた

ない人々にとつては、一つの銘柄は、他のものと、どう見ても似たりよつたりの味に思える」が、「その人たちがもし、洗練された味を探すだけの暇と意志と機会をもてば、どのタイプとのミックスが好ましいかについて「一家言をもつ本家の「鑑定家」となり得る」。つまり「蓼くう虫も好きずき」とはもつともであるが、「好みというものは洗練し得るといふ事実を隠せるものではない」というのである。そしてゴンブリッチが言う「趣味を洗練する」ことと密接に関わっているのが、私たちの文脈で言えば、「趣味を語る言葉」の問題だ。例えばワインのテイステイキングにおいては、特定の味覚に対応するさまざまな語彙を覚えていくことを通し、びみょうな感覚の差異や関連や同一性や連想に徐々に気づくことが出来るようになっていくのである。だが「重い／軽い」「辛い／甘い」くらいしかワインの味覚を語る語彙を知らない私などは、いつまで経っても「趣味を洗練する」に至らない。個々の経験がいつまで経ってもばらばらな印象にとどまったままで、互いに明瞭に関連づけられ、知の体系となっていくことがない。芸術(音楽)体験においても、感覚的印象と言葉との関係についての事情は、これとよく似ているに違いない。

ここで扱う対象は、ほとんど西洋の芸術音楽(＝クラシック音楽)に限られている。しかし言うまでもなく私は、「芸術＝高級vs娯楽＝低級」といった、古()蒼()とした二分法に与しようというわけではない。また芸術音楽と実用音楽の間に厳格な線引きをすることも出来ない(例えば今では「芸術音楽」に分類されているロック時代の合奏曲の多くやヨハン・シュートラウスのダンス音楽などは、(E)「実用音楽」であった)。にもかかわらず、両者の間には、それが目指す「ありよう」という点でかなり決定的な方向性の違いがあり、本書の構想の中で優先的にクラシックを例として取り上げるのは、それ相応の根拠があつたことだということをして、ここで少し確認しておきたい。つまり実用音楽は、ややこちようして言えば、その目的を有効に果たしさえすれば、とりあえずそれでいい。聴き手に快適な娯楽の時間を与えるとか、テレビの視聴者に印象的に商品の名前をアピールするとか、映画のある場面の恐怖感をいやがうえにも高めるとかいうことが出来さえすれば、それ以上あれこれ語り考える必要はない。もちろん実用音楽についても、それを語り考える楽しみが生まれうる可能性は常にあるが、そういうことをしなくても構わない。それに対して芸術音楽の特異性は、単に「聴く喜びを提供するだけではなく、それについて「考え」「語り」「知る」楽しみの次元というものを、つまり「趣味や知恵を深めること」を当初より前提として創られている点にこそある。このあたりの事情はクラシックだけでなく、モダン・ジャズだとか近世邦楽だとか、いわゆる「通」向けの音楽ジャンルには多かれ少なかれ当てはまることだろう。これらにおいては批評や理論の次元を最初からある程度想定しつつ、音楽が構想されていると言つてもいい。そしてこの種の音楽の聴き上手／語り上手になることは、決して単なる才能や感性の問題——つまり学習不能な事柄——ではなく、そこには暗黙の学習法則があり、間違えやすいポイントがあり、コツがあり、上達へのさまざまなステップがある。

岡田暁生『音楽の聴き方』より 一部改変

問一 傍線 a～f のひらがなを漢字に直し、漢字にはよみがなをつけなさい。

問二 空欄 A～E に入るもつとも適したことを次の選択肢のなかからそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。(ただし、同じ選択肢を二度使うことはない)

ア やはり イ たまたま ウ もともと エ 決して オ もつと

問三 傍線 I のように筆者が考えているのはなぜか、「から。」に続くように四十五字以内で抜き出しなさい。

問四 傍線アが「根本的な事柄とささいな事柄とを取り違えること」、傍線ウが「いかにも古びて見えるさま」という意味の四字熟語になるように空欄に入る漢字を答えなさい。

問五 傍線イ「議論」と熟語の組み立てが同じものを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。

ア 回転 イ 増減 ウ 予告 エ 就職 オ 無実

問六 傍線 II とは具体的にどうすることか、それについて述べた次の一文の空欄①～③に入るもつとも適したことを、①は七字、②は五字、③は四字で抜き出しなさい。

(①) を覚えていくことを通して、(②) を互いに明瞭に関連づけ、(③) としていくこと。

問七 傍線 III とは具体的にどうということか、八十字以内で説明しなさい。

問題二 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

日本の野球ファンなら「ラッキー・ボーイ」「ツキ男」、またアメリカのバスケットボールファンなら「ホット・ハンド」ということばに、なじみがあるはずです。

どのチームでも、勝ち試合には「本日のツキ男」という選手が存在します。四打数四安打三打点とか、五連続シュート成功のうえ、そのうち三回は三ポイントのロング・シュートだったとか。「単なる偶然^ア以外のミステリアスな力が今日はこの選手に宿っている」という判断が、そこには明らかに介在しています。

(A) これが本当だとすれば、実際の選手のデータは、明らかにランダムとはちがうパターンを示すはずです。ところが、バスケット選手のシュートの成功と失敗とを時間順に記録して分析したある研究によると、これはまったくの錯誤らしいのです。何度にもわたってデータをとれば当然、その選手が五、六回連続してシュートを成功させたり、また四、五回連続してミスしたりすることも起こるでしょうが、その確率は、ランダムにサイコロを振って丁半の連続が生じる確率と、ほとんど同等だったのです。実際にランダムな場合にこのような連続が起こる確率を人は過小評価している、という別の研究もあります。

私たちがふだん「ツイている」「ツイていない」という形容^aで理解している事象のほとんどは、偶然のいたずらで説明できてしまうというわけです。「とても信じられない」と思う人も多いでしょう。(B) そう思うこと自体、本来無意味な事象の継起に因果関係を見出そうとするヒト生来の傾向がいかに強いかを、物語っています。

どうやらヒトには元来、秩序や因果を発見しようとする強い認知傾向があるようです。本来意味やつながりがないとわかっているランダムな出来事や事象にも、意味や因果、あるいは法則を見出そうとする。これは非常に根強い、ヒトの本質的な性向です。

逆にいえば、ヒトは無秩序や、因果関係のなさを嫌うのです。言いかえれば、意味の「真空状態」を嫌うのです。それはたぶん、ほんとうは秩序や意味や因果関係があるときにそれを見落とすことが、生物の生存にとって致命的になりかねないからでしょう。

「電話は同時にまとめて鳴る」とか「傘を持って出ると晴れる」「車を洗うと雨が降る」などの、いわゆる「マーフィーの法則」は、そのあらわれとみることができます。また少しひやくしますが、臨床心理学で使う有名なロールシャッハ・テストも、その好例と考えることができます。ロールシャッハでは、単に「無意味なところに意味を見出す」だけではなく、その見出す意味が個々人の内面、特に抑圧された^c深層の願望や、恐怖を反映している点に目をつけるのです。そうだとすれば、ロールシャッハ・テストで被験者が「見る」コウモリや悪魔や天使や動物などは、単なる「錯誤」と呼び捨てにできるものでしょうか。第一ここには、「事実」や「正解」にあたるものがないのです。

前の「スポーツ・イラストレイティッド」や「ラッキー・ボーイ」なども含めて、一般的にこういうことはいえると思います。これらの例において知覚される「もの」は単なる錯誤などではなくて、主体が状況と関わり合うプロセスの中で生成された、生物学的な「意味」なのです。

ヒトにはまた、自分の信じたいこと、望んでいることを確認したい欲求があります。これは常識として皆知っているようで、実は皆その^dえいきょうを過小評価しています。

人々の大半は、自分が平均以上に知能が高く、平均以上に公平であり、平均以下の偏見^eしか持たないと思っているようです。またアメリカのある調査によると、高校生の七〇パーセントが、自分の指導力は同級生たちに比べて平均以上だと考え、平均以下と自己評価した人は、わずかに二パーセントに過ぎませんでした。また「他人とうまくやってゆく能力」については、なんと全員が平均以上と考え、六〇パーセント以上の生徒が「自分は上位二五パーセント以内」と考えていることがわかりました。

これとは逆に、「(C)」と信じたがるものだと示す証拠もあります。たとえば「総意誤認効果」というのがそれです。これは、周囲の大多数の人は、自分と同じ好みを持ち、自分と同じ判断をするはずだと思いきや、自分が自分の行動を周囲の大多数が支持してくれる、皆も自分の立場になれば同じ行動をとるはず、と人は信じたいようです。この総意誤認効果もまた、「人は自分の信じたいことを確認したがつている」ことの別の証拠といえるでしょう。

この「信じたいことを見出してしまふ」効果については、大きく分けて二通りの説明があります。一つは、「誰でも自分が優れている(まともである)」という証拠を欲しがっている、はじめからそういう証拠だけを探し、それに反する証拠に出会っても、無視するか、すぐに忘れる」というもので、これを動機論的説明と名づけることができます。

他方、^f「じゅんすい」に認知要因による説明も可能です。(D)、周囲は本人の喜ぶようなことしか言わないので、はじめから得られた証拠のサンプルが偏っている、という説明。これによれば「自分は平均以上」という(E)も、総意誤認効果も、ともにもうまく説明できます。

また対話や討論の場面では、失敗を(また成功もある程度)眼の前にいる他人に帰しがちな傾向があるということも知られています。これなども、「(F)」という動機論ふうの解釈もさることながら、単に手がかりが目に見えているかいないかという差だという認知論ふうの解釈が成り立ちます。というのも、対話場面では、自分の表情や行動は自分では直接見えず、一方、他人の言動は直接見えて、目立っているからです。

つまりここで認知論ふうといっているのは、人は常に入手できる手がかり、特に目につきやすい手がかりに原因を帰してしまいがちだという考え方のことです。

下條信輔『意識』とは何だろうか 脳の来歴、知覚の錯誤』より

問一 傍線a～fのひらがなを漢字に直し、漢字にはよみがなをつけなさい。

問二 傍線ア「偶然」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問三 空欄A、B、Dに入るもつとも適したことを次の選択肢のなかからそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。(ただし、同じ選択肢を二度使うことはない)

ア しかし イ それゆえ ウ したがって エ もし オ たとえば

問四 傍線イ「ランダム」の意味を次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。

ア 無秩序 イ 無意味 ウ 無作為 エ 無関心 オ 無分別

問五 傍線Iのような傾向がヒトにある理由は何か、五十字以内で説明しなさい。

問六 空欄C、Fに入るもつとも適したことを次の選択肢のなかからそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。(ただし、同じ選択肢を二度使うことはない)

ア 自分は周囲の皆と同じだ
イ 失敗は認めたくない
ウ 皆の期待に応えたい
エ 自分は周囲の人よりも優れている
オ 自分は周囲の人よりも劣っている

問七 空欄Eに入るもつとも適したことを漢字二字で抜き出しなさい。

問八 次の段落が入る箇所を本文中から探し、その直前の十字を抜き出しなさい。(ただし、句読点も文字数に含む)

このバイアスが知性や教育レベルとは関係ない証拠に、大学教授の九四パーセントが、自分は同僚の教授たちよりも優れていると信じていたというデータもあります。

問九 本文の内容と合致しているものを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。

ア ヒトには自身の信じたことを見出そうとする欲求があり、これを理解した上で行動を選択することが多い。
イ ヒトの多くが自身の能力が平均以上だと考えるのは、他人とうまくやっていく上で常に有意な立場でいたいという意識が働くからである。
ウ ヒトは、自己の能力の低さを隠すために、自分の失敗であっても眼の前にいる他人の責任だと主張しがちである。
エ ヒトは、自身の信じていたものが間違いだと分かったとき、心を守るために見て見ぬふりをする傾向がある。
オ ヒトは、周囲が当然ながら自身と同じ行動を取り、自分の行動を多くの人が支持してくれるものだと思い込みがちである。